

タイトル マルティン・ハイデガーにおける無と根拠の問題について

欧文タイトル **Das Problem über das Nichts und den Grund bei Martin Heidegger**

氏名 加藤 皓士
(所属 名古屋大学)

「無が無化するという前者の無いということと、差異の無化する無いということとは、確かに同じものではないが、存在者の存在の本性化に共に属しているという意味では、同一のものである」(GA9.S.123)。1949年の『根拠の本質について』第三版の前書きで、ハイデガーは同時期の講演である1929年『形而上学とは何か』の無(Nichts)と『根拠の本質について』で扱われた存在論的差異(ontologische Differenz)が同一のもの(Selbe)に属している点を指摘している。意図して分かれたこの二つの書物は、あるひとつの省察(Besinnung)を近くへもたらそうとしているが、それはなされないままにとどまると続いている。我々は一度その当時のハイデガーの関心から、『形而上学とは何か』と『根拠の本質について』の関係性について考察してみたい。

1927年『存在と時間』刊行後、ハイデガーは現存在の形而上学を標榜し、現存在の超越を主題とするようになる。『存在と時間』で彼は、存在一般を理解するための超越論的な地平として時間を挙示しようとした。現存在の形而上学では、存在了解の遂行である現存在の超越を主題とするようになる。『根拠の本質について』と『形而上学とは何か』は、現存在の超越についての思考によって結びつけられると考える。我々は無と根拠に対する思考が、どのように現存在の超越に結実していったのかについて考察したい。

この問題を考えるハイデガー研究上の動機付けとして以下の二つが挙げられる。一つ目は、『存在と時間』の段階ですでに「気遣い、すなわち現存在の存在は、したがって被投的企投として、無性の(無的な)根拠-存在を意味する」(SuZ.S.285)と考えられており、この時期からハイデガーは根拠と無性という概念を使いながら、現存在の有り方を徹底的に考察しようとしていることがわかる。ハイデガーが無と根拠という概念を用いながら、現存在の有り方について変わらず考えていることが確認できる。そのため無と根拠という問題系は、『存在と時間』から現存在の形而上学期を貫くものであり、我々は無と根拠概念の考察がどのように現存在の超越の理解に落とし込まれているのかについて考察する必要があるだろう。

二つ目の理由として、現存在の超越がこの時期の到達点であるとともに、これ以降の思考の移行を理解するうえで決定的に重要であることが挙げられる。現存在の超越は自由と同一視されている。前者の表現は用いられることは少なくなるが、後者の自由は真理の本質として考えられ、考察の対象となり続ける。1930年『真理の本質について』の第一版1943年の注において、5節「真理の本質」と6節「隠れとしての非真理」の間に「(出来事のうちに本性化する) 転回への跳躍 (der Sprung in die (im Ereignis wesende) Kehre)」がある点が指摘されている。また1946年の『ヒ

ューマニズムについて』において、『存在と時間』における「存在と時間」から「時間と存在」への転回の洞察が与えられるとされている(GA9.S.328)。真理の本質である自由を媒介にして後期ハイデガーの思索につながる転回が遂行されるようになる。そのため自由について検討することは、後期ハイデガーへの転回を理解することにもつながる。

我々は以下のような問いを立てたい。1) 無と根拠がどのように現存在の超越(自由)に属するのだろうか。2) 無と自由によって特徴づけられた、現存在の開かれたあり方は何を意味するのだろうか。

1)の問いに関して、以下のように考える。ハイデガーは無性に関して我々は十分に考察できていないと書いている。「それについて語られたのにもかかわらず、長い間汲みつくされ把握されることのなかったこの無性は、積極的なものであり、現存在の超越に属することができるものである」

(GA27.S.332)。無性は通常考えからするのであれば、文字通り否定的なものであり、それだけでは積極的な内容を持たないものである。しかし彼は無性が現存在の超越に属する積極的なものであると考えており、我々はそれがいかなる意味を持つのかについて考察する必要がある。

ハイデガーは根拠の根拠(根源)を自由であると結論付けることとなる。「超越としての自由はしかしながら、根拠のある一つの特有な「あり方」であるだけではなく、むしろ根拠といったもの一般の根源なのである。自由とは根拠への自由である」(GA9.S.165)。彼の考える自由は、自発性や自由意志とは異なり、根拠へと開かれており、根拠から自己や他の存在者を根拠づけすることができるあり方を意味する。我々はハイデガーが根拠という概念を使用して、現存在の有り方のうちに何を見出したのかを検討する必要がある。

2)の問いに関して、以下のように考える。無性と自由は両方とも現存在の開かれたあり方を示すものである。前者は現存在が存在者という観点からすると無規定であり、空虚なありかたをしていることを特徴づけるものである。後者の自由は現存在が開かれたあり方をしており、それゆえに根拠の根源でありうると考えられている。この意味の開かれたあり方は、積極的な内容を持たないという点では、空虚さを意味するだろう。我々は根拠の根源である自由が持つ、ある種の空虚さについて考察することで、無性と根拠の結びつきを読み取れると考える。